

● テーマ ●

ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ  
—エミール ギメと日本の僧侶、神主との問答—

The Approach of a European towards Japanese Religions :  
The Dialogues of Emile Guimet with Japanese Monks and Priests

● 発表者 ●

フレデリック ジラール

Frédéric GIRARD

フランス国立極東学院 教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Head of Researches, Ecole Francaise d'Extreme-Orient

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2008年6月11日(水)

---

フレデリック ジラール

Frédéric GIRARD

フランス国立極東学院 教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Head of Researches, Ecole Francaise d'Extreme-Orient,

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

### 略 歴

- 1980年 日本語学博士号 (パリ第七大学)  
1982年 バリ高等学院文献学歴史学部ディプロマ取得  
1991年 フランス国立極東学院 常任研究員  
2003年 フランス国立極東学院 教授  
2007年8月 国際日本文化研究センター 外国人研究員 就任 (2008年7月迄)

### 著書・論文等

#### 著 書

- 2008 *Vocabulaire du bouddhisme japonais* 日本仏教語彙集, École Pratique des Hautes Études, Sciences Historiques et Philologiques, II, Hautes Études Orientales 45, Extrême-Orient 9, Deux Tomes, Droz, Genève, 2008. LXXX+1688 pages, ISBN 978-2-600-01228-7  
2007 *The Stanza of the Bell in the Wind: Zen and Nenbutsu in the Early Kamakura Period*, Studia Philologica Buddhica, Occasional Paper Series, XIV, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, IV + 81 pages, ISBN 978-4-906267-60-6

#### 共 著

- 2001-2002 *Repenser l'ordre, repenser l'héritage - Le paysage intellectuel sous le Japon des Tokugawa (1600-1868)*, Droz-EPHE-IVe section, Paris-Genève, en collaboration avec Mmes Annick Horiuchi-Baba et Mieke Macé, XXI=524 p, ISBN 2-600-00641-9  
1997 • *Proverbes japonais* 日本の諺- 365 proverbes pour tous les jours -, Guy Gagnon, Frédéric Girard, Emi Inoue, Editions You-Feng, Paris, V+175 pages ISBN 2842790324

#### 論 文

- 2007 “Some aspects of the Kegon Doctrines at the beginning of the Kamakura period”, *Reflecting Mirrors, Perspectives on Huayan Buddhism*, Edited by Imre Hamar, Harrasowitz Verlag, Wiesbaden, pp. 309-324  
2007 • 「凝然大徳の『聲明源流記』—南都仏教と念仏との接点—」『論集 鎌倉期の東大寺復興 重源上人とその周辺』ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集 第五号、東大寺(法蔵館)、奈良、pp. 25-34.  
2006 • 「如浄禅師の風鈴頌の伝播—鎌倉時代における禅と念仏との交流—」、金澤文庫研究、317号、pp. 1-9.

(年号の後ろに•のものの、執筆言語は日本語)

## ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ

### ―エミール ギメと日本の僧侶、神主との問答―

エミール・ギメ (Emile Guimet、一八三六～一九一八) は、年代的には十九世紀と二十世紀にまたがる人ですが、ある意味では完全に十九世紀を象徴している人物と言えます。実業家の家系に生まれ、若い時から自分の人生を自分で決め、家業を継承しながら、一種の人間中心主義の人生を送り、理想と想っていたことを勇敢に実現することに努力し、成功したとも言えます。彼の業績を見ますと、非常に幅広く、かつ驚くべき教養の持ち主で、ギリシャ・ラテンの古典のみならず、ヨーロッパ中世・近世の歴史および思想の学問も汲み、また、他国の文化への好奇心も旺盛で、歴史学の方法論に注意しながら修身を完成し、自己の心を養った人物です。一方、彼自身の人間性もまた特筆すべきです。彼が父から受け継いだ家業の方針では、人間社会における以上、できるだけ利他的に公正な態度で、正義と平等の精神をもって会社の雇人に接するよう配慮しています。そのようなところに、人間への尊敬を重んじる態度が見られます。それはいかにもフランス風ではありますが、当時の理念として彼が信じた、社会主義の原理に基づいています。さらにそれは、特に十

九世紀に、例えばドストエフスキーのような知識人の間に流行していたフリーエ (Francis Marie Charles Fourier、一七七二～一八三七) の思想にも適った考え方でした。

ギメは、フランスの地方都市でありブルジョアを象徴する町、リヨンで一八三六年に生まれ、リヨンの北、十五キロ位のフルリュウ・シュール・ソーヌ (Fleurieu-sur-Saône) で一八一八年に亡くなります。エリートコースを歩んだ優れた人物といつてよいでしょう。父親は、特殊な蒼色の発明で有名になった化学者兼実業家で、Bleu Guinet 社を創業し、その蒼色は Bleu d'Outre-mer (ウルトラマリン)、もしくは本人の名で知られていました。母親は画家でした。息子のエミールは両親の影響を受け、幼い頃から美術的な感性に優れていて、陶器、絵画、音楽に傾倒する一方、学問、文芸、文学にも造詣が深く、人間と社会の発展の中心をなす哲学や宗教の問題に深い関心を持つようになります。ある意味では仕方なく一八六〇年に家業を継ぎ、後の一八八七年に、ペシネ株式会社と社名を変更しますが、早い時期から会社を自分の実験場としています。会社の雇人に、自身で作った曲や他の音楽家の曲を演奏しながら町中を行進させたりしました。彼の考えでは、自分と社員とが会社の中で、フリーエのいう「フアランステール」社会の最小単位からなる理想社会に相応しい一種の家族を構成することにより、理想的な社会ができ上がると思込んでいたのです。ギメは労働者の権利の弁護人となり、先駆的な役割を果たしています。特に、労働災

害保険や退職年金の権利については法律的に認められる以前に具体的に保障するとともに、社会的な進歩は先ず教育を通じて成されなければいけないという先駆的な態度の持ち主でした。このようなブルジョア上流階級の社会主義はフランスの産物と思われ、そういう思想はフランスの社会に深く根ざしていると言えるでしょう。

そのような思想の中には、カトリック教会が作っていた伝統神学や道徳価値システムへの抵抗思想が流れていて、無神論的な要素が多分に入っていましたので、キリスト教以外の宗教や思想システムへの関心が高まります。多神教や、神の存在を軽視し無視した儒教、とりわけ仏教等は、近代思想の要求に応じるような宗教思想でもありません。仏教は特に十九世紀には、カトリックの神のような道徳的權威がなく世俗的な哲学思想のように映り、知識人だけでなく、ギメと親しかった政治家で社会主義者のジュール・フェリー文部大臣や、頑固な性格で知られ、自由思想と日本趣味を持つジュール・クレマンソー大統領やレイモン・ポアンカレ大統領、元文部大臣で、トンキンとアンナンの首領であったポール・ベールも非常に関心を持っていました。例えば、一八七一年にフランスで東洋美術館を開いたチエルヌスキが来日し、美学的な関心によって高額な美術品を集めました。その態度に比べれば、ギメはあくまでも思想的な関心により東洋を遊学旅行しようとし、学術的な目的で宗教彫刻や絵画、書物を収集しました。大きな宗教思想や宗教システムを開

いた祖師者は必然的に当代の社会問題を解決できた人物だった、と信じていたギメは、宗教の研究により必然的に現代のフランス社会の問題を解くことができると思ひ込み、パリに新しい宗教と思想を伝えようとしたと言えるでしょう。

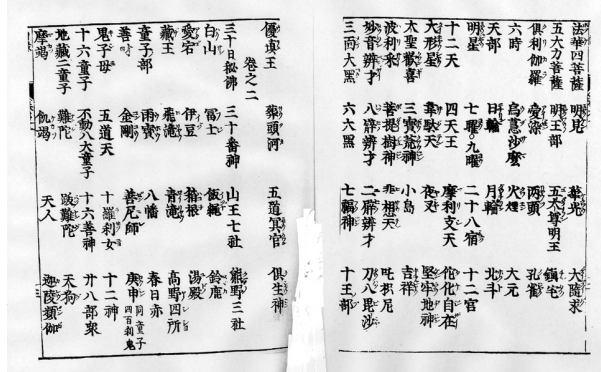
一八六二年のスペイン旅行に続いて一八六五〜六六年、ギメは三十歳にならないうちに、当時すべての文化の源の国とされ、昔から憧れていたエジプトを観光し、間もなく『エジプト畫、或る觀光者の日記』(*Croquis égyptiens : Journal d'un touriste*)を旅行記として出版します。翌年には、リヨン学士院の会員になります。その頃、先駆的な歴史論法でイエス・キリストの伝記を書いたエルネスト・ルナンの推薦を受け、東洋学会(*Société Asiatique*)の会員にもなっています。一八六八年、すなわち明治維新の年には、当時東洋の一種と見なされていたギリシャ・トルコ・ルーマニアの国々を旅行し、その紀行である『畫で見られたヨーロッパの東洋』(*L'Orient d'Europe au fusain : notes de voyage*)を出版します。また同じく、東洋とも考えられていた北アフリカの国々、アルジェリアとチュニジアを一八六九年に旅行します。十九世紀にはナポレオンのエジプト侵略や、その結果としてパリのコンコルド広場の中心に運ばれた、エジプトの象徴、オベリスクのイメージ等の影響もあって、東洋趣味が流行し、北アフリカから中近東までの旅行は、文人にとって不可欠なコースのようになりました。詩人ランボオの絶筆宣言の前に、フロベールやネルヴァルも東

洋紀行を残していますが、ギメが特にネルヴァルの日記を読んだのは、ただの偶然とは思えません。

一八七二年にギメは、それまでの観光や読書体験を記した『エジプト人のアジア』(De l'Asie des Egyptiens) という書物を出しています。ギメの東洋への関心が深まりと広がりを見せている頃、パリでは一八七三年に日本学者のレオン・ド・ロニー(Léon de Rosny、一八三七〜一九一四)の組織により第一回国際東洋学会が開催され、ギメは学会の極東部すなわち、中国・日本・インド・タタールを扱った部門に登録し参加しています。それが決定的なきっかけとなり、彼は東洋の文化と宗教、近代人類学・民俗学の方法論に関心を深めていきます。ド・ロニーの民俗学的方法論は一種の考証学ですが、東洋が精神におよぼした作用をその考察の中心に置いていることが、時代をよく反映していると言えるでしょう。学会の中でギメは、日本宗教学者のホフマン(Hoffmann)、エリオット Elliot、サトウ Satow、サンスクリット佛教学者のフーユー Foucaux、中国学者のレジェ Legge、真宗の知識人の島地黙雷、エジプト学者のマスpero Maspero、元中日スイス大使で日本宗教についての著作を残しているエイメ・アンベール Aimé Humbert という学者や、日本政府の代表者に会う機会を得ました<sup>11)</sup>。

その豊富な蔵書から推測しますと、おそらくギメは、ホフマン(Johann Joseph Hoffmann)

図1 『仏像図彙』ギメ美術館図書館蔵



一八〇五く七八）が翻案し日本仏教を紹介した書物として当時有名だった、元禄時代の土佐秀信筆『佛像圖彙』（一七八三）を読んだものと思われます<sup>三</sup>（図一）。

ホフマンの日本宗教の紹介は、シーボルト (Philipp Franz von Siebold、一七九六く一八六六) の『日本』における宗教描写の一部にあたりますが<sup>四</sup>、シーボルトは、神道、仏教、儒教について描写する中で、どの宗教が一番良いかとか、日本人はどれを最も深く信仰しているかというのではなく、むしろ、日本人はそのいずれにも通じており、いずれをも信仰の対象として平等に扱っているかのように紹介しています。そして、ギメにとつてもまた、日本人の宗教は、仏教か、神道か、それとも儒教かといった、二者択一的な態度を示すものではなかったと思われます。むしろギメは日本の宗教を全体として把握し、仏教のパンテオンを一種の組織化された宗教界と見ていたに違いありません。シーボルトは、日本の宗教現象と信仰者の心理を上下の別なく、流れの区別なく扱い、『佛像圖彙』も最も俗的な世界から最も聖なる世界に至るま



で、すなわち、世俗的迷信の対象になっていくものから、ヒンズー教・道教・儒教・神道・陰陽道・仏教すべての信仰の本尊になっている人物・神・菩薩・佛等すべてを少しの漏れもなく宗教の象徴の諸相として表し、構造的に紹介しています。ギメはそれを讀んだ上で自分のコレクションの構想を練り、『佛像圖彙』の中から仏教パンテオン各部の代表者、要するに祖師部、人間の世界、権現部、日本の神々の世界、本地垂迹の神仏混淆の世界、天部、外来とりわけ印度の神、明王部、人間の煩惱を煩惱で治めた人物、菩薩部、人間の精神を理性と智慧で回心させた人物、仏部、仏教の基礎概念を象徴する人物、といった代表的なイメージを取り入れようとはしました。ただし、神々や本尊の完璧な分類とは言い難く、また、一種のヒエラルキーを作っていますので、日本の神々はあくまでもそのヒエラルキーの下位に置かれ、中国の神々も本来の位置から遠くなっています。その分類の中に、「道具」という部門が設けられているのも興味深い点です。と言うのも、ギメは、佛・菩薩・天神・神々の人格や個性よりも、パンテオンという宇宙概念の中にどのような役割や機能を配置し、その機能の分類によって日本の本尊をどのように補えばよいのかという課題に突き当たったと思われるからです。すなわち、ギメの収集の目標は、一種の機能表を作った上でその表の中のブランクを埋めることにあっただけと思われまます。

さらに一点気がつくことは、ギメはよく『佛像圖彙』を参照したには違いありませんが、

その割にはこれを絶対的なモデルにはしていないことで、ギメは自分なりの機能のカテゴリ表を作りつつ、日本に滞在中、自分の頭の中でそれを整理していたものと思われます。例えば、『佛像圖彙』に記載されていないものを日本で収集して、同行していたレガメーにスケッチさせたりしています。ギメにとつて非常に重要な東寺曼荼羅は、『佛像圖彙』の中には見当たりませんし、また、彼が訪問したお寺も『佛像圖彙』には、ほとんど描写されていないのです。ギメは来日前の構想に加え少しずつ、宗教の学術的な把握の仕方や方法論を築き上げています。その宗教世界とはどのようなものだったのでしょうか。それについては後で述べることにします。

一八七六年にギメは、フランス政府発行の同年四月十日付け派遣勅令文書を受け、学術的な目的により文部省の奨学金を得て、東洋諸国の宗教を詳しく研究するためにフランスを立出します。そしてまず、米国フィラデルフィア万博を訪れ、繊細ながら表現力の抜群に優れた画家、フェリックス・レガメー (Félix Régamey、一八四四～一九〇七) や河鍋曉齋 (一八三一～一八八九) に会っています。当時、写真家の役目を務めていた画家のレガメーを連れて、日本・中国・印度・セイロンへ宗教調査に出かけます。彼は、学問の方法について次のように語っています。「私の関心の対象となっている古代やエギゾチックな

文化を本当に評価し味わいたいならば、自己の教育や文化環境から受けた信仰や偏見を取り除き、そぎ落とさなければいけません。孔子の思想を把握するためには、中国の儒者の頭脳を持たなければいけませんし、仏陀の教えを理解するには仏教精神を自分のものになければいけません。しかし、書物や物品の収集に触れただけでそれが可能になるでしょうか。思うに、成果を上げるには、現地を旅行し、信者と接触し、信者と話し合い、信者の行動を見ることが不可欠な条件だと思います。そう言った訳で、以前エジプトとギリシヤを観光したと同様に今世界を一周して、日本・中国・印度を見学することに決心いたしました」。しかし、ギメが訪れた日本はちょうど宗教改革の真最中で、排キリスト教、廃仏毀釈、神仏分離の政策が相次ぎ、大教院という機関において神仏合一を目的化されたのに続き、特に浄土真宗の島地黙雷の抵抗運動により、ギメ日本到着の前年には、その大教院が解散されるといった、凄まじい状況にありました。実際、ギメが論争した僧侶たちは、そのほとんどが元大教院の説法者でしたから、当時の最も代表的な宗教者と付き合うことができ、それは仏教側にとつては寺院と宗派を擁護する機会ともなり、お寺の彫刻美術品等を手放すのも容易でした。このことは、ギメにとつても非常に幸運であったといえます。

日本に着くや否やギメは、一秒たりとも時間を無駄にすることなく観光し、情報を集め、宗教道具・美術品、および宗教書を始めとする様々な分野の書物収集と、宗教運動の代表

者との教学的な議論を目的にした旅に出ます。八月二十六日に横浜に上陸し、九月二日に東京に到着。ほとんど休みをとることなく、日本在住経験のあるシャルル・ヴィルグマン (Charles Wirgman、一八三二〜一八九一)「日本ではチャールズ・ワグマンとして知られる」という英国の新聞記者兼漫画家を連れて金沢八景や鎌倉、片瀬江ノ島に取材旅行に出かけた後、同月九日に東京へ戻って、忠臣蔵ゆかりの泉岳寺や、上野にある徳川家の菩提寺である寛永寺、芝の増上寺を巡り、浅草寺の貫首、唯我韶舜(一八〇四〜一八九〇)に会い、河鍋曉斎を訪問します。同月十二日から十五日までは日光を訪れ、日光の住職、修多羅亮延(二八四二〜一九一七)に面会します。十月上旬には、近藤徳太郎と歌原十三郎という優れた通訳者を連れて東海道を人力車に乗って進み、同月四日に箱根の関を通り過ぎて、九日は名古屋に泊まって長栄寺の住職に会い、住職様の手から悉曇「日本仏教におけるサンスクリット学」の手引きを授かります。十三日と十四日には伊勢神宮へ行き、宮司であった田中頼庸と浦田長民に会ったと推測できますが、議論はできず、ただ神楽を見ただけでがっかりして去っています。十六日には京都に到着して、六宗派の僧侶と談話しています。当時、大津の日吉神社の大宮司、西川吉輔は、ギメを宣教師だと思い込んで会いに行こうとしています。ギメは旅行中、福沢諭吉の海外旅行や万博のレポートにて美術富国を主張したり、有名な京都府副奉行の楨村正直(一八三四〜一八九六)や、美術・

図2 ギメ『日本散策』(1878)

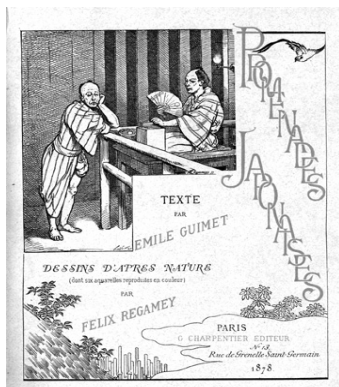


図3 ギメ美術館(パリ、イエナ広場)の内部および外観



文化・文芸の振興策を強く推し進めた九鬼隆一(一八五〇〜一九三一)の援助によりいろいろと見学したりできたのは幸運であったと言えます。殊に、三重県の著名な經仏師、山本藻助に東寺の立体曼荼羅のレプリカを注文できたことは、ギメが日本旅行で達成した大きな出来事と言えましょう。

ギメは十一月三日に神戸から上海へ出発し、中国には一カ月間ほど滞在します。その後、印度には少なくとも一週間滞在して、セイロンも訪問しています。しかし、中国と印度、セイロンの観光には随分がっかりしたようで、旅程を大幅に短縮して帰国します。翌一八七七年三月にパリに到着して間もなく、文部省へレポートを提出し、『ボンジュールかな

がわ』 (*Bonjour Kanagawa*) と、『日本散策』 (*Les promenades japonaises*、図二) を出版。翌一八七八年にもレポートと『日本散策』を出しています。おそらく手を加えてはいたでしょうが、その著作の冒頭で旅行の印象を、日本に着いた途端にあたかもキケロの作品から逃げ出した人物に会って古代ローマにいたかのようなうだ、と述懐しています。<sup>五</sup>

日本観光後のギメの活躍としては、レポートの中で述べているように、美術館を造ったこと（一八七九年にリヨンで、文部文芸大臣のジュール・フェリー臨席の下、ギメ美術館を創設）と、美術館を通じて東洋とフランスとの知的交流を開いたこと、出版物を刊行した点が挙げられます。<sup>六</sup> 美術館を、印度・中国・日本・エジプト・ギリシャ・ローマのすべての神々を含めた宗教美術館にしたいと言っています<sup>七</sup>（図三）。出版物に関しては、ギメ美術館発行の雑誌 (*Annales du Musée Guimet*) と単行本シリーズ (*Bibliothèque d'Études du Musée Guimet*) のほか、一八八〇年にはコレージュ・ド・フランスと組んで『宗教学雑誌』 (*Revue de l'Histoire des Religions*) を創刊します。一八七八年にギメは故郷の町リヨンで国際東洋学会を組織し、パリ万博では日本で集めた美術品、特に東寺曼荼羅のレプリカを展示しています（図四）。その折に、大変興味深い目録を作っていて、それを参照すると、真言密教は同じエジプトから生まれたイシス信仰の東洋的なヴァリエーションであり、<sup>八</sup> 東寺曼荼羅はイシス銅板の東洋的な産物であると考えていたことが窺われます。

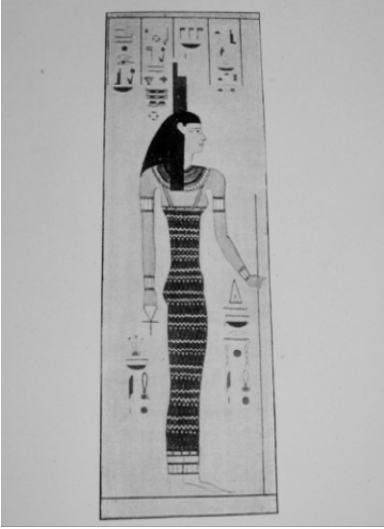
図4 ギメ美術館 東寺立体曼荼羅



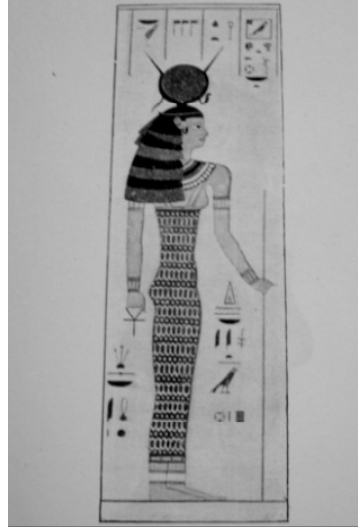
ギメの学術的な足跡は終生イシス信仰に集約できますが、ここからも、おそらくギメはイシス信仰こそが、彼が考える宗教学の基礎的構造を表現していると考えていたものと想定できます(図五)。一八八三年に『ローマ風のイシス』(*L'Isis romaine*)<sup>九</sup>、一八九五年に『アピュレーの神』(*Le Dieu d'Apulie*)、一八九八年に宗教的迷信に反抗したプルターク「プルタルコス」の哲学を説明した『プルタークとエジプト』(*Plutarque et l'Égypte*)<sup>一〇</sup>、一九〇〇年に『ホルのイシス崇拜教団』(*Les Isisques de la Gaule*)<sup>一一</sup>と相次いで出版し、宗教のシステムについて考えていた傍証になります。そうした著作の中でプラトンの哲学が常に最高位にあることは、ギメ自身の考え方を映していると思われます。一八八四年、ギメはフランス政府にリヨンの美術館を寄付し、一八八

図5 ギメ『ローマのイシス』より

天の神々の主宰神オシリスの妹としてのイシス



テーブ市守護神と神々の主宰神ホルスの母としてのイシス



九年にリヨンからパリに移設され、サデイ・カルノ大統領の下で、開館されます<sup>二〇</sup>。以降、一八九三年と翌九四年にかけて、日本や印度から何度も僧侶を招聘して仏教法要を行っています。一九〇〇年から〇三年にかけては、中国やエジプトの文化と宗教について連続講演会を開催し、パリ万博を機に日仏協会の副会長に就任します。パリで人気を博したギメ美術館では一九〇五年には、のちに、政権を脅かす女スパイとの風評も得た、有名なマタ・ハリ Mata Hari の舞踊公演も行っています。

ギメが生涯にわたり研究し続けたイシス信仰は、古代ギリシャ・ロー



マのパンテオンの神々と、各地の現地信仰の神々を混淆させている点に特色があります。その構造は概ね、一つの決まった機能や役割を持つエジプトの神にギリシヤとローマの神を当てはめ、そういった基礎の上に現地の神を当てはめるといふものです。エジプトの神とギリシヤの神へロドトス (Herodote、四八四〜四二五) を結びつけたのが最初のようにですが、後に形而上学的に幾つかの存在のレベルを用意し、新プラトン派の哲学やヘルメス聖典の神秘的な解釈に基づいて *translatio graeca* (ギリシアへの文化移動、譲与) が行われました。その結果を略記すると次の通りです。

エジプト

ギリシヤ

ローマ

アモン

ゼウス

ユピテル (主宰、天)

オシリス

ディオニゾス

バークス

オシリス

ハデス

プルト || セラピス (イシスの夫 + アピスの牡牛)

オシリス || カノペ (火之神、壺の中に死者の内臓を納める壺、水を吐く人間の頭の壺、口

ーマ、ポンペイ)

イシス

デメテール

セレス

イシス                   イヨ、プロメテの娘（十六世紀）

ホルス                   アポロ                   男性のヘカト

童子ホルス、Har-pe-hered || ハルポクラト   Harpocrate   （エロス羽童子）

青年ホルス || Aroëris（密儀の沈黙の神）

三頭、蛇體のセルベル Signum triceps   （獅子 || 現在、犬 || 未来、狼 || 過去）（輪廻無常の時間）

トット―野生犬頭アヌリス   ヘルメス                   メルクル（智慧、文字）

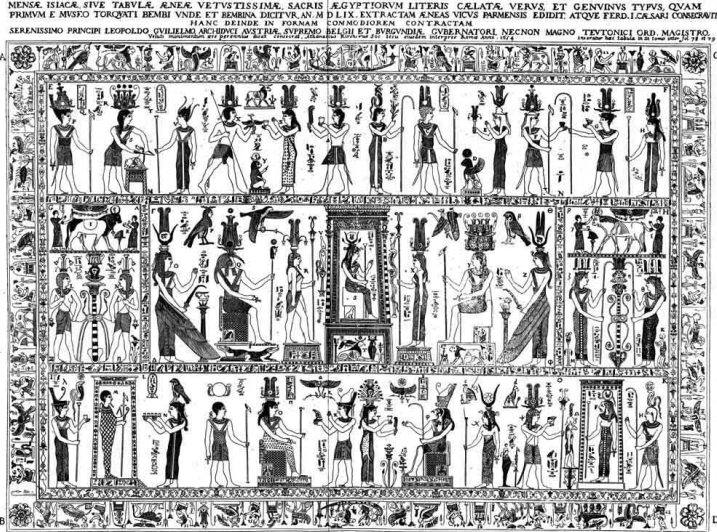
このような構造を徹底的に整理したのがルネサンス時代の思想家たちですが、例えばマルシリオ・フィチーノの『プラトン神学』（一四七四年）によれば、エジプトとプラトンとキリスト教の宗教哲学は、いずれも真理と愛としての絶対神を明らかにしており、ヘルメス―トット聖典はプラトンの哲学や福音の源であって、オシリスの神話はキリストのパッション「受難」になぞらえることができるかと主張しています。ヘルメスの象徴たるカデューシエ（ケルケイオン）はオリーブの枝を捲く蛇から成っていて、弁舌や商売や医学の象徴でもあるといいますが、仏教でいえば、仏敵の悪魔を降伏させるクリカラ不動の形に似ていますし、魔除けと心身浄化と和泉の発掘の役目を果たす地藏菩薩の錫杖とも類似

している、とギメは指摘しています。

イシス伝説によれば、殺されてニール川に捨てられバラバラの體になったオシリスは妻のイシスによつて甦り、息子のホルスを産ませます。オシリスは豊穰と再生を象徴する神としてニール川と同一視されるとともに、セラピス・オシリスと牡牛のアピスの合一神にして土地・豊穰・言葉・植物・再生の神であり、あの世の神の長い髭の老人ハデスの姿で三頭の犬（犬、狼、獅子）を側におく、時間と永遠の神、植物の冠を被った農業豊穰の複合神でもあります。カノプという名前で知られ、聖水と豊かな再生の植物としてディオニソスと合一されたオシリスは、手に劍と鞭を持ち、羽の付いた宝石冠を被ったミイラの姿をとつており、ローマやポンペイで死と再生の密教的な性格を帯びている儀式「一般には「密儀」と呼ばれる」の本尊ともされてきました。

プルターク「プルタルコス」によれば、オシリスはニール川、イシスはニール川に養われていた土地のことであり、ホルスはその土地から出た植物や食べ物等を表しています。各々の神は、それぞれが一つひとつの宇宙的な原理を合理的に説明するものであり、哲学的な概念が象徴的な姿かたちを纏ったものである、と見なされます。その世界観は、神々を、ある摂理の下に治められた神格と見なしており、ギメはそれを仏教の因縁に例えています。

図6 プラトンに伝えられたといわれているイシス銅板  
16世紀 (1525~27) トリノ美術館蔵



イシスはギリシャ風オシリス神話の主宰神として、豊穰・農業・結婚・社会秩序の女神デメテルと融合し、エレウシスの密儀の本尊、運命の神としても、近世ヨーロッパで崇められました。十六世紀のヒエログリフへの関心と、とりわけ、いわゆる「イシス銅板」の発見とが、イシス崇拜を復興させ、エジプト神話の研究を進展させました。

「イシス銅板」とは、イシスを中心に三十五柱の神を描いた銅板です(図六)。この図像は、明らかな偽作であります。この図像は、明らかな偽作であります。伝説では一五二七年にローマで発見されて後にトリノで保存された有名な「イシス銅板」、即ち、プラトンに伝えられたと云われて新プラト主義的な解釈も

入れてイシスの密教的な儀式的な伝統を彫刻の形で伝えた銅板は、ルネサンス当時には古代の美術と信じられていた物で、その画面では、各々の神はそれぞれの役割を持っており、その役割を、特定の動物の部分や持物 (attribut)、道具類によつて表現しています。イビスの顔トット、鷹の顔のホルス、死者の靈魂を導く犬の面のアヌビス、牡牛のアピスや鱈、スフィンクス、スクルピオ、ミイラや冠、玉、首飾り、棒、錫杖、スケプトルム、壺、さらにそこには、解読不可能な偽物のヒエログリフが刻まれています。これらは、ルネサンス期以降、ヨーロッパで何度も複写されています。中でも、一五五九年のエネアス、ヴイコの複写が有名です。この銅板は完璧な宗教世界を描いているものと信じられたため、この銅板をきっかけとして、エジプトを出発点とするすべての国のすべての神、および神の動物や象徴、属性の比較目録が作られることとなりました。この銅板を註釈したロレンツォ・ピニョラ (Laurenzo Pignoria) は、印度への旅行経験のあるセロステイスとともにオシリスの伝説に立脚した比較宗教学を構想します<sup>二三</sup>。アタナシウス・キルヒヤー (一六〇一〜一六八〇) は、エジプト、印度、中国、日本、ヨーロッパ、アメリカの神々についての新プラトン派的・汎神論的な解釈 *lectio idealis* により、宗教、神学、テオソヒア「神智学」、哲学を同一視して、膨大な『エジプトのエディプス』 (*Oedipus Aegyptiacus*、一六五二年) を著述するとともに、それを略した『絵図の中国』 (*La Chine Illustrée*、一六七〇年)

を出版しました<sup>一四</sup>。

彼の哲学では、世界は四つのレベルに分けられ、神々が表している宇宙的アイデアと元素的な概念から成っています。この四つのレベル（アイデア、理性、天上、元素世界）は、眼に見えない「神的な中心」から「発出」するさまざまな神々の働きによって、お互いに通じ合うものとされています。アモンはすべてを照らす原理、最上神であり、イシスは豊富な自然、お月様で、すべての形に現れる普遍的、母系的な自然界であり、受け身の原理であるのに対して、オシリスは能動的な原理であります。ホルスは所動と能動の両面を併せ持つ原理です。三者で一つのトライアド（和の原理）を構成しています。ただし、キルヒヤーは同じ形而上学の構造を、三つのレベルによって分析しています。第一に、光明的な原理が心霊な意向を表現し、隠れた原動力を明らかにする。第二に、宇宙的、湿的な暖かい精力が、上下往復の働きにより常住な物質の生産を起こす。第三に、混雑し否定的な勢力が、人間や生き物の欠点、暗い精神、嫉妬心、偽善、闘争心を促すといえます<sup>一五</sup>。エリファス・レヴィ (Eliphas Levi) は『魔術の歴史』 (*Histoire de la Magie*) の中で、キルヒヤーのイシス銅板解釈を原型の世界、理性の世界、色身の世界とし、形而上学的な三つのレベルに納めています。そうした構造に従って、神々、ヒエログリフや漢字、属性等の習合により、宇宙では *emanatio* (流出) *resorptio* (帰着) の両過程で救済的なプロセスが進

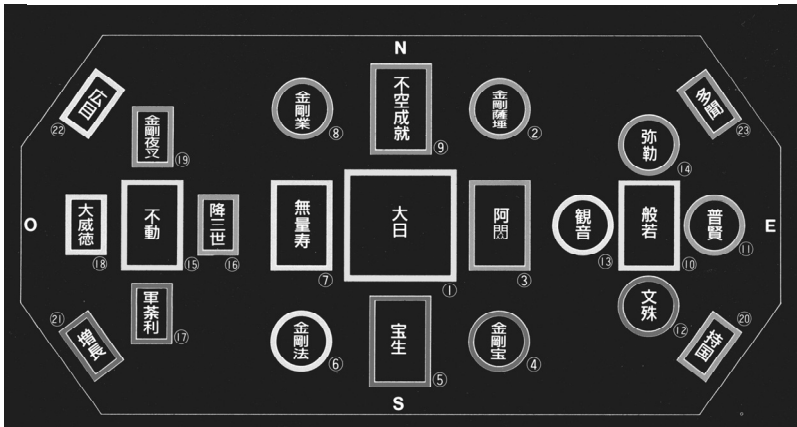
んでいる、というわけです。

さらにもう一歩進めて、キルヒヤーは比較宗教学を試み、例えば、阿弥陀はホルスカ、ハルポクラトという神に当たると言っています。日本の宗教は中国から輸入されたものであるから、結局は、インドから渡来し、そして、インド渡来のものはエジプトに由来すると断言しています。すなわち、日本に見られる神には、必ずエジプトにおいてそれに相当する神が存在するはずだと言うのです。中国と日本で使われている漢字も、エジプトのヒエログリフに相当すると思ひ込んでいたようです。キルヒヤーの日本の宗教分析の前提にはまず禅宗があり、禅宗の中にも二つの流れがあつて、一つめは靈魂が不滅であることを認めない人たちで、これはエピクロス派に当たると判断しています。二つめは、阿弥陀崇拜と分析し、それはピタゴラス派に当たると決めつけています。三つめは、法華宗ですが、ここでは日蓮宗のことを言っており、その中では弘法大師と修験道と僧兵を一括りにし、残酷な宗教というように描写しています。そして、阿弥陀は女性と男性の両性を持つと言いながら、主として女性として扱っています。キルヒヤーの議論は、たとえその前提が間違っていたとしても、比較宗教学の始まりとはいえることから、ギメの興味と関心を惹いたものと思われれます。

今述べたような思想をある程度まで受容していたギメの宗教観によると、神々の姿や属

図7 ギメ美術館 東寺立体曼荼羅配置図

『甦るパリの万博と立体マンダラ展』図録（西武百貨店、1989）から引用



性、宗教道具の役割などは、哲学や形而上学、合理的に組織された概念の世界を成しています。それが先行するイシス信仰分析に影響されていることは、彼の幾つかの著作の引用からも分かります。『プルトークとエジプト』の中で、イシスは大自然と思惟を表し、すべての神々の積極的な特質を掌る主宰神であり絶対なる者、神にも憧れている女神であるために、自然界、人間界と絶対神との仲介者、宇宙の主・靈魂の主宰者、永遠たるキリスト教の神に近い存在になっていきました。それは若い時のギメが読んでいたネルヴァルの「絶対なる女性」の性格を帯びています<sup>一六</sup>。

前述した一八七八年のパリ万国博覧会における展示方法は、やはり『佛像圖彙』の順序に従って、仏部、菩薩部、明王部、天部、権現部、高僧祖師部の順に成されていますが、ギメの説明をみ

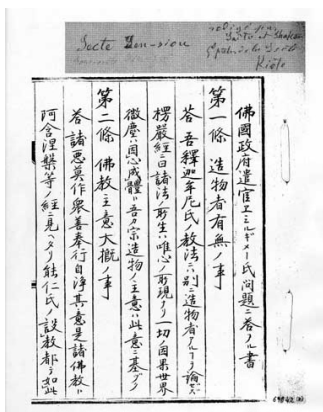


ると、これを無理やり三部にまとめようとしています(図七)。第一には、智慧と慈悲を同時に沈黙によって表現する大日如来を中心に、他の四つの佛がその役割を分担しています。第二に、菩薩部は佛と同じ役割を表していますが、人間に対し、理性と智慧に基づく説得力の持ち主である菩薩は辯舌を働かせる存在でもあるのです。第三に、他の四部を含めて理性と智慧では説得できない衆生に対して、煩惱や脅迫を利用して説得せざるを得なくなる段階の存在を表しています。この分類は明らかに、イシス銅板の分類を模範としています。確かに強引さが目立ち、今日からみれば事実在即していないにしても、ギメの新プラトン派的な考え方を象徴している点に意味があり、注目に値すると考えます。ギメは、部分的にですが大胆な比較宗教学を試しているからです。以下にその要点をまとめてみましょう。

まず大日如来の智拳印はキリスト教の大祭司の手の挙げ方と同じで、阿弥陀仏は宇宙の靈魂であり、四佛や四菩薩の髪のはけ方はホルスのものと同じです。エミール・ビュルヌフ(Emile Burnouf)著『宗教学』(*Science des religions*)を参考に、般若(Han-gnia)菩薩のグループは光、火、智慧、辯舌、論法、論証の神であって、ギリシヤのアグニ(ignis)神に当たり、ラテン語のアグヌスのヒエログリフ(Agnus)でもあります。文殊菩薩の錫杖(pedum)は如意珠と同様に、人間の願い事かなえます。日本の神社の建築構造も、

鳥居を含めて古代エジプトの神殿 (*naos, lucus, ecclesiae*) と変わらないほど類似しています<sup>一七</sup>。日本を散歩するとエジプトの宗教を思わせるような遺跡に遭遇します。鎌倉で見た子供の墓はエジプトのフタ *Phra* を連想させ<sup>一八</sup>、日本の神社の神楽もまた、古代ギリシャと印度の宗教的な舞を思わせます<sup>一九</sup>。宗教の象徴である道具の中では、錫杖の説明が特に長文で述べられています。錫杖を振るうと、人間が驚愕するべく台風 (*Typhon*) も逃げ去る。錫杖の頭にはすべての原素が含まれ、猫も表象されているから、雌猫が同時に二十八匹の子猫を生むように、錫杖の頭から二十八宿が出てきて、生と死の輪廻によって万物を生まれ変わらせ、悪霊を払い、霊魂をあの世に導くといわれます<sup>二〇</sup>。仏教僧が着ている袈裟も、お墓の死者の屑の着物から出来たもの、麻製であるのがあたかもイシスの崇拜者の如きであります。釈尊の母である摩耶夫人は、メルクルの母であるマヤ、キリストの母であるマリアにほかなりません<sup>二一</sup>。北野天満宮の神主との問答をギメが自ら翻訳し、イザナギとイザナミの男女の神のところに括弧を入れて (オシリス) と (イシス) と書き込んでいるのは、エミール・ギメの考え方をよく物語っています。もつと哲学的なレベルで宗教の因縁は、プルタークが言うように、神々を上まわる力として、ギリシャ・ローマ哲学、特にストア派の運命 (*Fatum*) の力に喩えられますが、それは、迷信から合理主義への進歩的な思想と認められます。

図8 臨濟宗興聖寺の齋藤龍関からギメに宛てた書簡 ギメ美術館蔵



おそらく、そういった習合宗教の構造を説明するために、ギメは日本の僧侶や神主と問答を行ったのでしよう。しかし、絶対者、宇宙精神の智世界、個々別の煩惱の俗世界という三重構造からなっているイシス信仰は、日本の習合宗教にうまく当てはまりません。それゆえギメは、最終的に問答を翻訳するのをあきらめたのでしようか。

ギメが京都で出会った僧侶や神主のすべてが判明してはおりません。しかし、日蓮宗の何人かの他、妙満寺の高麗智運から聖典のリストを貰っています。浄土真宗西本願寺の飛雲閣で、島地黙雷（一八三八〜一九一一）、赤松連城（一八四一〜一九一九）、渥美契縁（一八四〇〜一九〇六）や他の僧侶らと終日論議した貴重な記録も残っています<sup>三〇</sup>。

真言宗の尊壽院住職、金光寺信元（一八三五〜一八九八）にも会っているほか、平家の子孫に当たる浄土宗の聖光寺主角谷隆音（一八一七〜一八八三）からは論議以外に、大黒天と弁財天に関する説明を受けています。相国寺の末寺、臨濟宗興聖寺の住職、齋藤龍関（一八三一〜一八九二）は、白隠や仙涯に匹敵するような非常に有名な禅宗の説法者で、大凶院の教導でありました（図八）。天台宗妙法院の村田寂順

図9 問答を仏訳しかけた未完原稿、  
ギメの真筆 ギメ美術館蔵

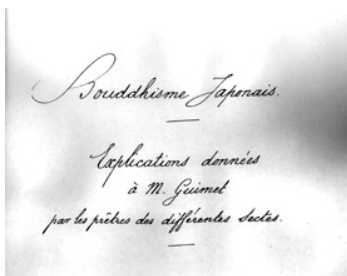
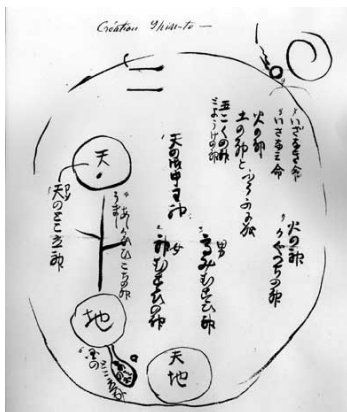


図10 北野天満宮の神主八人との  
問答草稿に附された神道の造化に関する肉筆図 筆者不詳



は、別名、多喜寂順として知られています。北野天満宮では神主八人と相談論議を行なっています。始めはギメ自身が翻訳していますが、話があまりにも込み入ってきたため、第一の質問で即座の論議を終え、書面での返答を待つことにしています(図九、一〇)。通訳者として、近藤徳太郎と歌原十三郎以外に、富井政章(一八五八〜一九三五)、今泉勇作(一八五〇〜一九三一)、山田多田濟(一八五五〜一九一七)がいました。ギメは関西滞在中に、大教院の説法者に数多く会っています。おそらく、前記リスト以外にも様々な人物に会う機会があったと思われませんが、これ以上のことは分からないのが現状です。また、ギメが中宮寺の勢至菩薩の彫刻を入手したことは、ベルナル・フランクが突き止めました。また、一体ギメがこれを何処から手に入れたのかも分かっていません。

ギメの問答を見ると、日本の宗教に関する學術調査を目的としながらも、キリスト教を背景とする自分自身の関心の所在がかなりはつきりと表れた内容になっている、と言えます。ヨーロッパ宗教の絶対なる神と対比して、日本の宗教では何が最高の原理であるのか、何が善悪の基準を表象することができ、すべての形而上・道徳上の問題に関して裁きを下しうる究極の権威者は何であるのか。また、それに当たる原理というのは宇宙の規則と同じであるのか、あるいはそういった規則から外れることがあるのか。宇宙の主宰者であれば、規則から外れて奇跡を起こす力もあるはずだが、実際にそういう主宰者はいるのか。また、そういった原理が常住なるものであれば、個々の存在たる人間、生き物の靈魂とどのような関係にあるのか。不可離な関係にあれば、靈魂は不滅であるはずであるし、靈魂滅論の場合、人間の死後、どのような運命が待っているのか。そういった原則はまた、人間の行動をどのように決めているのか。自然界に表れているのか、あるいは、経典といった聖なる言葉を記した証拠に基づくのかなど、いろいろな角度から、同じことを聞いています。終わりに、神々と佛とは別のように見えるけれども、どういった共通原理に基づいて結ばれているのかというような配慮のある質問もしています。

各宗の返事の概略を紹介すると、次の通りです。

● ギメの問答

一、Creation 造物、造物者有無

神道 造化三神即天御中主神。禪宗 唯心ノ所現。日蓮宗 小乘魔醯首羅天「神名」造作大乘説因縁所成。真宗 本有自然ノ理。浄土宗 衆生一心。真言宗 正報業感、依報自在。天梵天。天台宗 能造主宰不立、萬物心造法、因果、真如。

二、Puissance et vertu du Hotoké 幸災、威徳、地獄天国の果報の主宰

Juge et sujet de la rétribution des actes 禍福所由

神道 神の威徳。禪宗 無し。日蓮宗 小乘業、大乘眞妄。真宗 自己ノ因縁ヨリ感招。浄土宗、真宗 因果自然ノ常理、隔絶セル古今ノ變化。浄土宗 自業内因、佛神主宰賞罰外縁、唯心所造。真言宗 地獄或ハ天堂エ到ルハ自業自得。天台宗 法身般若解脱ノ三徳、常樂我淨ノ四徳、十力四無所畏等ノ威徳。

三、Miracles, Effets magiques 奇特、法力怪異

神道 無し。禪宗 無、神通力。日蓮宗 神通力、不思議。真言宗 因果自然の常理。浄土宗、真言宗 神通不思議。天台宗 禪定智慧咒力發得、神通自在。

四、Vie future 來生、心魂未來ニテ生死有無

神道 天に魂不滅、罪惡人魂不歸天。禪宗 心性不生不滅。日蓮宗 人魂漸滅セサル。真宗 三世展轉シテ無盡ナレハ三世即チ無始無終ナリ。浄土宗 人魂至処ハ此魂此身内。真言宗 三世因果。天台宗 成毀アル者ハ肉身ナリ始終ナキ者ハ心魂。

五、Morale 心理(修行)、心を理ム、耶蘇教の十戒

神道 神所賦の魂自識善惡邪正是非忠孝、神魂歸天。禪宗 贅沢な質問。日蓮宗 五戒十善、諸惡莫作衆善奉行。真宗 「諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸佛教」「通戒偈」。浄土宗 本律寺、遁世寺、官寺三寺。真言宗 戒法ヲ護持。天台宗 修心、戒定慧。

六、Histoire et doctrine 佛教主意大概、宗旨の來歴、來歴と教示

神道 造化三神、機能の萬神、人、神武。禪宗 「諸惡莫作衆善奉行自淨其意是諸佛教」  
教外別傳不立文字。日蓮宗 佛界因果ノ功德受得。真宗 因縁生起ノ法理。浄土宗 十界  
同一佛性。真言宗 我身即チ佛身。天台宗 顯密禪ノ三。

七、Culte des mânes et des esprits 鬼神

Dieux japonais et Buddha 神と佛、佛説神、漢神、國神

神道 行、威儀作法清淨、誠敬。禪宗 天部佛法守護ノ善神 租税ヲ納ムル。日蓮宗 隨機緣崇奉、漢神崇敬セス。真宗 阿彌陀佛ヲ信奉スルノ外別ニ奉スル所ノ神ナシ 餘ノ宗旨ニ佛ノ變化身。淨土宗 權實ニ神、三國五行訖神。真言宗 神德靈妙不測、國家守護佛法擁護、大國主ニ大黒神後人憶説。天台宗 神則佛 佛則神。

八、Textes sacrés de base 所依の佛經、佛祖書目

神道 『古事記』 『古事記傳』 『日本書紀』 『日本書紀通證』 『大日本史』 (水戸學) 『古史成文』 『古史傳』 (平田篤胤系統)。禪宗 『臨濟録』 『金剛般若波羅蜜經』 『般若波羅蜜多心經』 『傳法正宗記』 『本朝高僧傳』 『興禪護國論』 等。日蓮宗 『法華經』 「十卷」百四十八編 「四十冊」 (録内)二百五十九編 「二十五冊」 (録外) 『註法華經』 「十冊」 『註法華經義』 「二冊」 『日向講聞書』 「一冊」 檄文十一編 「一冊」 (十一通廻狀) 他受用祖書 「六冊」。真宗 『佛説無量壽經』 二卷 唐僧鐙譯 『佛説觀無量壽經』 一卷 晁良耶舍譯 『佛説阿彌陀經』 一卷 鳩摩羅什譯。淨土宗、真言宗 『大日經』 『金剛頂經』 等 『秘密儀軌』 八十卷四部儀軌 『享和儀軌』 及初中後ノ儀軌 『蘓悉地經』 『蘓婆呼童子經』 『釋



摩訶衍論』『菩提心論』。天台宗『法華』『仁王』『金光明』(三經)『大論』『中論』(二論)『法花玄義』(二十卷)『法花文句』(三十卷)『摩訶止觀』(四十卷)『觀音玄義』(四卷)同疏(四卷) + 密教之部『大日經』『金剛頂經』『蘇悉地經』『瑜祇經』『要畧念誦經』(五部秘經)、大儀軌「百二十八卷」享和儀軌「十二卷」 + 『觀無量壽經』『大阿彌陀經』『小阿彌陀經』(極樂淨土)。

一種の追記として、真言宗にのみある項目、すなわち「印ノ義」であります。印というのは印可受定不改ノ義であり、三世ノ諸仏十方ノ薩埵各印相印義であります。すなわち、「佛菩薩ノ本誓」であり、「手ニ結ヒ顛シテ改轉セザル義ヲ印ト云」、「各々尊々ノ本誓」にあたるという項目が注意されますが、他の宗派にはない道具の部の中でジェスチャーの象徴的な意味を追求するために、ギメはそれを特別な質問としています。

問答はこのような項目から成っています。返事を見比べたギメは、主宰者を認める神道と主宰者を認めない仏教との間には大きなギャップがあり、両方の信仰者である同じ日本人はそのギャップをどう考えているのか知りたいと思ひ、最後に神と佛との結びつきについて質問しますが、この問題に関してはまとまった結論が出ていません。また、個々の問

題に關してもまとまった統一された返事は得られませんでした。実は造物主に關して、縁起、因縁、唯心、真如等は教學的にも結びつけられませんが、ギメの時代にはそういった概念に關する知識と分析がまだ不足した状態にありましたから、ギメにとつては、どうしても自己の理解を超えた概念にとどまっていたと言わざるを得ません。問答を翻訳するのをあきらめた彼は、それでも引き続き、凝然の『八宗綱要』を学芸員のアルフレッド・ミリユー (Alfred Milloud、一八六四—一九二九) に翻訳させてみましたが、満足するような結果は出ませんでした<sup>三三〇</sup>。仏教學の知識の進歩を待たなければならぬと悟っていたのではないのでしょうか。

問答のテキストに關して言えば、フランス語と日本語では場合によつて、異なる言い回しを使っています。質問全体をながめると、ギメは、西洋の宗教に共通の原理があるように、東洋の宗教にも共通の原理があるはずだという考えを持っていたのではないかと思えます。フランスの思想史にとつて十九世紀は、合理的な宗教、世俗的な宗教を求めた時代であつて、人間の理性に外れる考え方があればそれを外してもよいとさえ考えられていた時代でした。

思うにギメは、自分が設定した質問には統一された返事を期待していませんでした。しかし、バラバラな返事しか得られず、およそ統一できるような答えはなかなか出てこなかったの

で、彼はおそらく、東洋の宗教構想を解き明かす鍵は得られなかったという認識に達した。それで、日本の僧侶や神主から受けた返答の翻訳をあきらめたのに違いありません。

ギメは、古代とルネサンス時代のイシス信仰の解釈に基づいてでき上がった混淆宗教を分析し、キルヒヤー等の世界宗教の分析を継承・徹底しながらも、一方ではそれを一旦は棚上げにして東洋の宗教を現地調査し、その比較を試みました。そして、比較の結果、諸宗教に上下関係をみる、旧説の進歩史観に立脚したヒエラルキー観を捨て、その代わりに諸宗教を平等化して捉えようとする新説の方法論を考えようとして、「宗教学」を構想しました。確かにギメの問答では彼が期待していた普遍的なルールや規則性は見出されず、ある意味においてギメの目論見は失敗に終わっているように見えます。しかしながら実際には、現実の東洋の宗教に触れるという衝撃的な体験をしています。その点で、ギメによる問答は、宗教学という学問の進展に大きく寄与したと言えるのではないのでしょうか。

注

- <sup>1</sup> *Le Positivisme spiritueliste. De la méthode conscientielle et de son application en ethnographie* (1879), *La Méthode conscientielle, essai de philosophie exactiviste* (1887) の二篇著作を残してゐる。
- <sup>2</sup> Congrès International des Orientalistes, Premier Congrès des études japonaises, 1re session, 1873, à Paris, de 1873, p. XX.
- <sup>3</sup> *Nippon* の第五卷「*ニッポン* Pantheon von Nippon, Butsuzô zui (Fû siang t'ü wei) を翻訳してゐる。副題を *Das Buddha-Pantheon von Nippon, aus dem Japanischen Originale übersetzt und mit erläuternden Anmerkungen versehen*, von Dr. J. Hoffmann. pp. 45–176 + index. *ニッポン* 邦文を Butsuzô zû, sive adumbrationes imaginum buddhaicarum, conditorumque sectarum theologicarum, Delinea vit Tosano seô sô Kino Fedenobu, 1690, 5 vol. in 8°. Ed. altera 1696. Conf. *Catalogus librorum et manuscriptorum Japonicarum a Ph. Fr. de Siebold collectorum, annex enumeratione illorum, qui in Museo Regio Haggano servantur. Lugduni Batavorum* 1845. *ニッポン* の *ホフマン* は Fû-siang t'ü-wei so-jin jung-schû mulu 佛像圖彙所引用書目録を参考にしてゐる。同 pp. 160–162° p. 38 : Anhang I. Alphabetis Verzeichniss der in japanischen Buddhapantheon citirten schinesischen und japanischen Werke.
- <sup>4</sup> Ph. Fr. Von Siebold: *Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan, Und Dessen Neben—Und Schutzländern:*

- Jeso mit den Südlichen Kurilen, Krafjo, Koorai und den Linkiu-Inseln, nach Japanischen und europäischen Schriften und eigenen Beobachtungen*, bearbeitet von Ph. Fr. Von Siebold... Fünfter Band : Abtheilung V. Pantheon von Nippon. Abtheilung ... Leyden, Bei Dem Verfasser, 1852. pp. 1-186, + tables LXXIV.
- 五 *Promenades japonaises*, p. 12.
- 六 *Rapport au Ministre de l'Instruction Publique et des Beaux-Arts sur la mission scientifique de M. Emile Guimet dans l'Extrême-Orient*, Lyon, 1878.
- 七 *Exposition Universelle, Galeries historiques—Trocadero. Religions de l'Extrême-Orient. NOTICE EXPLICATIVE sur les objets exposés par M. Émile Guimet et sur les peintures et dessins faits par M. Félix Régamey*. Paris, Ernest Leroux, Editeur, 1878, p. 5.
- 八 ギメは、仏教は他のすべての東洋宗教を含んでみると、晩年でも例えば『老子とバラモン教』（一九〇四年）で論証している。
- 九 *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 1896.
- 一〇 *Nouvelle revue*, Paris, 1898.
- 一一 *Revue archéologique*, t. 36, 1900, et t. II, 1912, t. XX, 1914, et t. V, 1916.
- 一二 一九四五年にギメ美術館は国立美術館となる。

- 一三 *Vere e noue imagini de gli dei de gli antichi. Images anciennes et nouvelles des Dieux des Anciens*, 1615.
- 一四 ギメ美術館図書館が *La Chine Illustrée* を所蔵していることから、ギメがそれを読んでいたと考えられる。
- 一五 *Véritable et naturelle interprétation de la table Isiaca (l'era & genuina mensa Isiaca, sive tabulae Bembinæ interpretatio)*, p. 341.
- 一六 ネルヴァルのイシス信仰とフリーエの思想的影響については、カシーユ・オボー Camille Aubaud の研究『« Anamorphoses d'Isis dans l'oeuvre de Nerval »』*Texte de la communication au Groupe Hugo du 21 octobre 1989* を参照されたい。
- 一七 *Exposition Universelle. Galeries historiques—Trocadéro. Religions de l'Extrême-Orient. : NOTICE EXPLICATIVE sur les objets exposés par M. Émile Guimet et sur les peintures et dessins faits par M. Félix Régamey*. Paris, Ernest Leroux, Editeur, 1878, pp. 7–12.
- 一八 *Idem*.
- 一九 *Idem*, pp. 43–44.
- 二〇 *Exposition Universelle. Galeries historiques*, 1878, p. 13.
- 二一 *Exposition Universelle. Galeries historiques*, 1878, , pp. 13–15.

- 111) *Annales du Musée Guimet*, 1880, tome I; *Montai ryakuki* : *Fu Kyōgi ryakutō*, Tokyo et Kyoto 1877. 島地黙齋の全集第五卷 *Montai ryakuki* 『問答略記』とて題して刊行されたこと。<sup>111)</sup>
- 112) Milliod, Alfred: « Esquisse des huit sectes bouddhistes du Japon par Gyan-nen ». *Revue de l'histoire des religions*, 13<sup>e</sup> année (Paris, 1892), tome XXV.

#### 参考文献

- Annales du Musée Guimet*, 1880, tome I; *Montai ryakuki*: *Fu Kyōgi ryakutō*, Tokyo et Kyoto 1877.
- Asahina, Michiko 朝比奈美知子 (compilé et traduit par): *Furansu kara mita bakumatsu ishin* « *Iryusutorashion Nihon kankei kijishū* » kara 『フランスから見た幕末維新「イリュストラシオン」日本関係記事集』から』 / Toshindō 東信堂 / Tokyo / 2004.
- Aubaud Camille : « Anamorphoses d'Isis dans l'oeuvre de Nerval », *Texte de la communication au Groupe Hugo* du 21 octobre 1989 (inédit).
- Bertrand (L'Abbé) ARCH T. II *Dictionnaire Universel, historique et comparatiste de toutes les Religions du Monde*. 4 vol. in-4. Paris 1848.
- Bonjūru Kanagawa*, *Furansujin no mita Meiji shoki no Kanagawa* 『ボンジュールかながわ フランス人の見た

- 明治初期の神奈川』『Emirū Gime エミール・ギメ著』Aoki Akisuke 青木啓補訳『Yūrinđō 有隣堂』Tokyo 1977.
- Breen, John & Teeuwen, Mark: « The History of a Shrine: Hie », *A New History of Shinto*, Wiley-Blackwell, New York 2010.
- Caylus, *Recueil d'Antiquités Egyptiennes, Etrusques, Grecques et Romaines, A Paris*, Chez Desaint & Saillant, rue S. Jean de Beauvais, vis-à-vis le Collège, MDCCCLXI, MDCCCLVI, MDCCCLIX, MDCCCLXI, MDCCCLXII, MDCCCLXIV (1761, 1756, 1759, 1761, 1762, 1764), *une description de la table Isiaque*, 7<sup>e</sup> vo., pp. 34–119. Bibliothèque N° 7651–7656.
- Chappuis, Fr. et Macouin, Fr. (sous la direction de): *D'Outremer et d'Orient mystique, les itinéraires d'Emile Guimet*, Editions Findakly, Paris, 2001.
- Congrès International des Orientalistes, Premier Congrès des études japonaises, 1re session, 1873, à Paris, de 1873. Darneslester, James: 12-VI 5983. *Essais orientaux. L'orientalisme en France. Le Dieu suprême des Aryens*. In 8° Paris 1883.
- Exposition Universelle. Galeries historiques—Trocadéro. Religions de l'Extrême-Orient* : NOTICE  
*EXPLICATIVE sur les objets exposés par M. Émile Guimet et sur les peintures et dessins faits par M. Félix*



- Régamey*, Paris, Ernest Leroux, Editeur, 1878.
- Femety, A.J.: *Les Fables égyptiennes et grecques dévoilées et réduites au même principe avec une explication des Hiéroglyphes et de la Guerre de Troie*, 2 vol. in-12, Paris, 1786.  
1064 et 10177 32.VI.
- Frank, Bernard: *Le Panthéon bouddhique au Japon: Collections d'Emile Guimet*, Musée National des Arts Asiatiques Guimet, Paris, 1991.
- ベルナルル・フランク『魅るパリ万博と立体マングラ展―エニール・ギメが見た日本のほとけ信仰―フランス国立ギメ美術館創立100周年記念』西武百貨店、1989.
- Guimet, Emile: *Promenades japonaises*, G. Charpentier, 1878. 青木啓補訳、『ギメ日本散策』レガメ日本素描紀行、新異国叢書第二輯』雄松堂出版、1983.
- Jablonsky: *Pantheon Aegyptiorum*, Francof, ad Viadr., 3 volumes, 1750, gr. in-8°.
- Journeil, Louis Jean-Baptiste de: *Religion Fusionnisme ou Doctrine de l'universalisation réalisant le vrai catholicisme*. In 8 Paris s.d. 24848.
- Kircher, Athanasius: *Oedypus Aegyptiacus*, trois tomes (1652–1655). *Japoniorum & Tartarorum idolatriacae parallela*, t. III, Synt., 1.

- Laflaye, G.: *Histoire des culte des divinités d'Alexandrie, Sérapis, Isis, Harpocrate, et Anubis hors de l'Égypte depuis les origines jusqu'à la naissance de l'école néo-platonicienne*, In-8°, Paris 1884, 7001 ARCH 28 et svtes.
- La Revue du Louvre et des Musées de France, n° 3, 1991 : articles de B. Frank (« Les Collections bouddhiques d'Émile Guimet: histoire et présentation ») et de J. Griès (« La muséologie des galeries du Panthéon bouddhique du Japon et de la Chine dans le nouvel hôtel Heidelberg-Guimet »).
- Lévy-Rueff, Bruno: *Émile Guimet (1836–1918), Fondateur et donateur du musée d'histoire des religions : Le musée Guimet*, Pars X, Nanterre, Maîtrise d'histoire, sous la direction de M. Demier, Année 1998, 145 pages.
- Leclant, Jean: *Inventaire bibliographique des Isiacca*, 1940–1969, Bibliothèque du Louvre.
- Lenoir, Alexandre: *Nouvel Essai sur la Table Isiaque Paris*, 1809.
- Idem*, *Hyéroglyphes*, 1621 42 vol.: 1808 2614 Arc. V-18, Ichi-V-15 2285-9811-9813.
- Idem*, *Description historique et chronologique*, 1803 : 2823, Arch. P-IV.
- Idem*, *Calendrier des anciens Egyptiens*, AIBL, XXIV, 2, 1 : P III 48346 R. (24/2).
- Létronne, à propos de l'*Astronomie solaire d'Hipparque soumise à une critique rigoureuse, et ensuite rendue à sa vérité primordiale* (sic), par J.B.P. Marcoz, Paris, Debure frères &c. 1828, in-8°, de lxxj et 352 pages, dans Journal des Savans, de l'Institut de France, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris, Novembre 1828, p.

684. 7651-5656 Zr 125 V.

Loewenthal, E.: *Le Cogitativisme ou la Religion Scientifique basée sur le Positivisme Spirituel*, 10 pages de 8° ,

Paris 1886. 13322 Arch. A-V.

Meiji bukkkyoshi hensanjo 明治佛敎史編纂所 (Institut d'histoire du bouddhisme de l'époque Meiji), Tomomatsu Entai 友松圓諦 (complété par), *Meiji bukkkyoshi hensanjo zōmokuroku* 『明治佛敎史編纂所藏目錄』, *Catalogue de la Bibliothèque de l'Institut d'histoire du bouddhisme de l'époque Meiji*, Tokyo, 1972, 216 pages.

Millioud, Alfred: « Esquisse des huit sectes bouddhistes du Japon par Gyan-nen », *Revue de l'histoire des religions*, 13<sup>e</sup> année, tomes XXV, XXVI, Paris, 1892.

Milloué, Louis de: « Notice sur le musée religieux fondé à Lyon par Émile Guimet », *Revue de l'histoire des religions*, tomes I et II, Paris, 1880.

Montai ryakuki 「問答略記」 ' *Shinagaji Mokurui zenshū* 『真地黙雷全集』 ' daigokan 第五卷 ' Honganji shuppanbu 本願寺出版部 ' Kyoto 京都 ' 1976, pp. 818-849.

Montfaucon, Dom Bernard de: *L'Antiquité expliquée et représentée en figures, tome second, le culte des Grecs, des romains, et des autres nations, première partie, Contenant le culte des Grecs & des Romains; Tome second, seconde partie, La religion des Egyptiens, des Arabes, des Syriens, des Perses, des Scythes, des Germains, des*

- Gaulois, des Espagnols, & des Cathaginois, par Dom Bernard de Montfaucon, Religieux Bénédictin de la Congrégation de S. Maur, Seconde édition, revue et corrigée. A Paris, Chez Florentin Delaune, La Veuve d'Hilaire Foucault, Michel Clausier, Jean-Geoffroy Nyon, Etienne Gameau, Nicolas Gosselin, et Pierre-François Giffart, MDCCXIX (1719), Avec Privilège du Roi, t. II, partie 2, liv. 1, ch. 1-3.*
- T. II, partie 2, Livre II pp. 331-342: Livre II, *Où il est parlé de la Table Isiague, des autres Tables Egyptiennes, des prêtres, & de plusieurs autres choses qui regardent le culte Egyptien.*
- Omoto, Keiko & Macouin, Francis: *Quand le Japon s'ouvrit au monde, Découvertes Gallimard, Réunion des Musées nationaux*, Paris, 1990. *Nihon no kaikoku Emuru Gime aru Furansujin no mita Meiji* 『日本の開国 エミール・ギメめぐるフランス人の見た明治』 Omoto Keiko, Furanshisu Makuan 尾本圭子、フランス・マクロン著、Trad. Omoto Keiko 尾本圭子訳、Sogensha 創元社、Osaka 大阪、1996.
- Penissard, Monique: *La Japohyomaise*, Favre, Lausanne-Paris, 1988, 263 pages.
- Pignorius, Laur: *Mensa Isiaca, quae sacrorum apud Aegyptios ratio et simulacra subjectis tabulis oeneis simul exhibentur et explicantur*, edit. III : Amstelodami. 1669, in-4°.
- « Ru mondo iryusutore » Nihon kankei sashie-shū 『ル・キンド・イリュストレ』日本関係や絵集、Yokohama Kaiko Shiryōkan 横浜開港資料館、Yokohama, 1988.

Von Siebold, Ph. Fr.: *Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan, Und Dessen Neben- Und Schutzländern: Jesso mit den Südlichen Kurilen, Kratfo, Koorai und den Liukiu-Inseln, nach Japanischen und europäischen Schriften und eigenen Beobachtungen*, bearbeitet von Ph. Fr. Von Siebold.

Fünfter Band: *Abtheilung V. Pantheon von Nippon*. Abtheilung. Leyden, Bei Dem Verfasser, 1852. pp.1-186, + tables LXXIV.

Saint-Martin (Louis-Claude de): *Tableau naturel des rapports qui existent entre Dieu, L'Homme et l'Union*. In-12, Edimbourg (Lyon)/cote: 1782. 4793 33-VI).

Sueki Fumihiko 末木文美士 :Shiboruto/Hohuman to Nihonsyūkyō 「シーボルト／ホフマンと日本宗教」 『季刊日本思想史』五十五号、 pp.26-42、 1999

Yamamoto Jun-ya 山本順也 : Shiryō honkoku Nishikawa Yoshisuke shokan (2) 「資料翻刻 西川吉輔書簡 (11)」 『Ritō rekishi minzoku hakubutsukan kiyō』 『粟東歴史民俗博物館紀要』、 n° 8, 2002.

なお、ギメ美術館所蔵史料の複写や撮影にあたりましては、フランス・マクアン図書館長に大変お世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。

エミール・ギメ(一八三六〜一九一八) 略年表

- 一八三六 リヨン生まれ
- 一八六〇 蒼色家業を継ぐ
- 一八六二 『スペインを旅して』
- 一八六五〜六六 エジプト見学
- 一八六七 『エジプト畫、或る觀光者の日記』
- 一八六八 明治維新の年、ギリシャ、トルコ、ルーマニアを旅行。『畫で見られたヨーロッパの東洋』
- 一八六九 アルジェリア、チュニジアを旅行。エイメ・アンベール『日本圖繪』
- 一八七〇 リヨン芸術学士院会員授与式演説「民俗音楽」
- 一八七一 チェルヌスキの日本見学
- 一八七二 『エジプト人のアジア』
- 一八七三 パリにて、レオン・ド・ロニー主催の第一回国際東洋学者會議の極東部門(中国、日本、インド、タタール)に参加。東洋と近代人類学、民俗学の方法論に関心を深める
- 一八七六 フィラデルフィア万博にてレガメーや曉斎に会う。レガメーと中国・印度を旅し、フランス文

部省奨学金により日本へ宗教調査に行く

八月二十六日 横浜、九月二日 東京、鎌倉、江ノ島、九月二〜一五日 日光、一〇月上旬 東

海道、一〇月四日 箱根、一〇月九日 名古屋、一〇月一三〜一四日 伊勢、一〇月一六日 京

都、一一月三日 上海へ出発。中国に一カ月間、印度に一週間滞在

『ボンジュールかながわ フランス人の見た明治初期の神奈川』

一八七七 三月、フランスへ帰国。ギメ著レガメー画『日本散策』出版

一八七八 第三回パリ万博日本館に、ギメの収集品「東寺曼荼羅」出品。フランス文部省への東洋学術出

張レポートを出版

一八七九 リヨンにギメ美術館創設

一八八〇 『宗教学雑誌』創刊、『日本散策、東京―日光』、『曼荼羅』

一八八二 『リヨン地方の民族音楽』

一八八三 『ローマ風のイシス』

一八八四 ギメ、フランス政府に美術館を寄付

一八八六 ギメ、レガメー共著『日本における演劇』

一八八九 ギメ美術館開館。『印度における一週間』

- 一八九一 美術館にてクレマンソー大統領臨席の下、小泉了諦、善連法彦による仏教儀式、親鸞に対する  
報恩講を行う
- 一八九二 凝然の『八宗綱要』をミリュールがフランス語訳
- 一八九三 シカゴ国際宗教会議後、ギメ美術館にてクレマンソー大統領臨席の下、真言宗の土岐法龍によ  
る御法楽を催す。『四度印圖』の翻訳作業を行う
- 一八九五 『アピュレーの神』
- 一八九六 『ローマのイシス』
- 一八九八 『プルトークとエジプト』。美術館にてクレマンソー大統領の前で慈悲心を象徴している釈迦本  
尊にしてラマ教の儀式を催す
- 一九〇〇 『ゴールのイシス崇拜教団』（一九一二年、一九一六年連載）
- 一九〇三 『アンチノエで発見されたアジア的象徴』
- 一九〇四 『老子とバラモン教』
- 一九〇六 『中国の演劇について』
- 一九〇九 『ローマ帝国のキリスト教信徒』
- 一九一〇 『哲学者のサモサトのルシアン』 『ギメ美術館の中国絵画』 『社会学政治学ノート』



- 一九一三 『エジプトの靈魂』
- 一九一四 『ギメ美術館のアンチノエの肖像群』
- 一九一五〜一六 『戦後、政治経済学ノート』
- 一九一八 『和声の問題』。リヨン郊外のフルリュウ・シユール・ソーヌで死去
- 一九四五 ギメ美術館が国立美術館となる

## 発表を終えて

このたび、一年間の日文研での研究滞在を終えて自分の研究の一部たるエミール・ギメについて、とりわけ明治九年におけるギメと日本の僧侶・神主との問答を分析して、あるヨーロッパ人の見た日本宗教と当時ヨーロッパで考えつつあった新しい宗教学の成立に関わる問題点を提起しようとした。そのような研究が、ヨーロッパと日本との文化交流の一つのステップを明らかにし、西洋と東洋のお互いの理解の仕方をも描写していると考えられるなら、非常に重要な問題を扱っているといえる。

ギメの建設した東洋美術館は今でも盛んに見学されている。このことは、ギメ美術館が所蔵する美術品や資料などが見学者の東洋への見方や考え方に大きな影響を与えている証左である。その意味でギメ美術館はギメの業績の一つであるのは確かだ。しかし、彼が帰国して間もなく書いた文部省へのレポートを見ると、美術館の建立は彼が目指したうちの一つにすぎないということ認めざるを得ない。にもかかわらず、その影響力の大きさによって彼の学術業績を判断しがちである。とりわけ、我々現代人にとって、東洋、東洋学、日本の宗教、日本人の思惟方法、ヨーロッパが生んだ宗教学等はギメに負うところが誠に多いと言っても過言ではない。何十年が経っても、我々が考えている日本の宗教、東洋思想はいつの間にか無意識的に、ギメが作った東洋観や日本像に拠るところが大きいと認めるなら、彼の意図や、実際の考え方、東洋におけるギメの業績を検討する意味はあると思われる。特に、日本人の宗教者との談義の試みが、彼の意図を示唆しているのは興味深く、ギメが本当に目指したことに辿り着くための貴重な資料であると思うだけに、それらを紹介する必然性はあると考える。多少、エキゾチシズムの方へ曲解されがちなギメの真の考え方を把握するためにも、その問答を読んで分析する価値はあると思う。

ギメと日本の僧侶・神主との問答の解説を手伝っていただいた日文研の皆様にお礼を申し上げる。特にご指導下さった稲賀繁美教授に感謝の意を表す。しかしながら、残念なことに、京都滞在中にギメが見学したお寺等まで足を延ばして現地調査を行なおうとしても越えられない壁に当たり、情報不足のまま滞在が終わってしまったので、改めて別の機会が与えられ、現地調査が完成することを願っている。

フレデリック ジェラル

